

## 編集後記

2010年4月に薬害肝炎検証委員会の最終提言が行われ、この中で厚生労働省の医薬品安全行政を被害者・外部専門家などが評価・監視する第三者機関を例えば大臣官房に設立することが含まれた。また、この提言には、リスクが予期されており、まだ検証はされていない段階からのリスク回避行動を求める医薬品安全対策分野における予防原則が謳われている。この種の状況では、従来の仮説検定に基づく統計よりは、本誌第38巻第2号の特集で取り上げたベイズ統計は大いに役割を果たすことが期待される。今や、統計家のみならず、統計を用いて適切な意思決定を行える実務家の育成も急務である。

話は変わり、2012年に神戸で国際計量生物学会議 (IBC, International Biometric Conference) が開催される。わが国では2回目のことである。1回目のIBC東京会議は1984年、26年前のことであった。当時、鳩山由紀夫氏は、奥野忠一先生の依頼でIBC東京会議に関わるあて名書きなどの雑務を献身的にこなされていた。学会直前に政界転身の噂が広まり、学会期間中に林知己夫組織委員長が、小生を光栄にも鳩山氏と見間違え、「今度出るそうですね」と挨拶されてしまったことを思い出すと、今でも苦笑してしまう。鳩山氏は、今度の国際学会でも組織委員を務めることになった。献金リストには最近まで奥野先生の名前が載っていたので、天国の奥野先生が依頼したのだろうと勝手に推察している。

この84年の計量生物学会議での個人的な思い出は、奥野先生を通じてコントローラー委員会の佐藤倚男先生に依頼のあったサテライトシンポジウム開催である。佐藤先生は、藤田利治先生や小生ら当時の若手に企画を一任し、結果としてArmitage教授や、FDAのDubey氏などの講演会が実施できた。特にPocock教授とArmitage教授との連携で多重性などの臨床評価上の話題を日欧で共有できたことが、後の厚生省臨床試験の統計解析指針に繋がったのである。ところでサテライトシンポジウム当日、直前まで佐藤先生は会場で指揮をとっていたのだが、シンポジウムが始まると何処かに消えてしまった。講演が終了し、国内外の大先生方を夕食会へ見送った後に、「どうだった」と言って戻ってきて、若手の打ち上げにつきあって下さった。このことがやけに印象に残っている。2012年の国際計量生物学会議も、若手が今後の臨床評価についての行動を起こすチャンスになることを期待したい。

(椿 広計)